

思春期女性の自傷行為

林 直樹

Summary

自傷行為とは、意図的に行われる自己身体を損傷する行為の総称である。希死念慮を伴うなどの重症のケースは、精神科的な対応が必要になるが、大多数は家族や周囲の人々からの支持を得て、自傷を行う状態から脱することができる。自傷行為には、思春期における社会の独立したメンバーになるという心理社会的な課題や第二性徴発現などの身体的変化への適応といった多くの課題に直面して生じる混乱とみることができる。また、その発生に女性ホルモンの関与が想定されており、月経周期やホルモン動態との関連についての研究が進められている。

Key words

自傷行為(self-injury)
思春期(adolescence)
精神科治療(psychiatric treatment)
女性ホルモン(female sex hormone)

はじめに：概念・疫学

自傷行為(self-injury)とは、自らの身体を意図的に傷つけることを意味する用語である。そこには、自分の四肢や指、顔、腹、胸といった身体部位に対する切る、裂く、刺す、切断する、火傷を負わせる、殴打する、咬むといったさまざまな行動が含まれる。そこでは一般に手首切創が最も多くみられることが知られている¹⁾。また、救急医療機関で問題となっている薬物の過量服薬は、この自傷行為と同列のものとして扱われることがある。臨床的には、その後の対応の決定や予後の予測のために、自傷行為と自殺未遂との鑑別が重要である。自傷行為を自殺未遂から区別するために、これまで非自殺的自傷(non-suicidal self-injury；NSSI)、故意の自傷(deliberate self-harm；DSH)といった概念が導入されてきたが、実際には鑑別は困難であることが少なくない。それぞれのケースにおいて自殺の意志の有無、身体的ダメージの大きさ、その手段の深刻さなどに基づいて慎重に評価を進める必要がある。

疫学的研究では、一般人口において高い頻度で自傷行為がみられることが報告されている。系統的レビュー²⁾では、特に青年期に発生率が高く(報告には7.5~46.5%と幅がある)、12~14歳に多く発生し、性比は女性が男性よりも若干高いという報告が多い。

現在、自傷行為は学校や家庭、地域社会における精神保健の問題となっており、それへの対応は重要な課題となっている。その発生要因として

Naoki Hayashi
帝京大学医学部精神神経科学講座主任教授